

資料紹介

元台湾特別志願兵の戦時東ティモール体験 —陳千武氏ヒアリング記録—

後藤 乾一[†] (編・解説)

Wartime Experience in East Timor of Former Taiwanese Army Special Volunteer —Testimonies of Mr. Chen Qian-wu—

Ken'ichi Goto ed..

Immediately after the possession of Taiwan at the end of the 19th century Japan expected the island to serve a role as the base for her southward advance. Especially around the time of eruption of war between Japan and China in July 1937, Taiwan Colonial Government came to push forward three major policies of “Japanization, industrialization and use of Taiwan as a base for Japan's expansion toward south.”

Following the outbreak of the “Greater East Asia War” a great number of Taiwanese young men who had been indoctrinated with the Japanization education were drafted and sent out to Southeast Asia, then called “southern co-prosperity sphere,” as low-class soldiers, as civilian “industrial warriors” or “agricultural warriors”. Included in those young men was a 21-year-old Chen Qian-wu who was sent to Portuguese Timor (now Democratic Republic of Timor-Leste) as a member of the Army Special Volunteer System in the autumn of 1943.

The present information material is a full record of the three and-a-half-hour-long hearing by the “Forum for Research Materials on the Japanese Occupation of East Timor” concerning Chen's wartime experience in East Timor.

Mr. Chen Qian-wu, now the highest figure in the world of poetry in Taiwan visited Japan in the Spring of 2004 and the interview was held at Waseda University's Institute of Asia-Pacific Studies on the 19th of May. The editor's commentary that precedes Mr. Chen's statements points out a serious lag in Japan's studies and collection of materials concerning East Timor during the Japanese occupation, which on the other hand strikingly throws light on the importance of Mr. Chen's testimonies.

解説

現代の台湾詩壇を代表する長老詩人陳千武氏(1922年、台中州南投郡出身)は、台湾が日本の植民地であった「大東亜戦争」のさ中、陸軍特別志願兵⁽¹⁾の一人としてポルトガル領ティモール(現東ティモール民主共和国、2002年5月独立)に徴用された体験を有している。

陳千武氏にとって、この若き日の二年半余の南方体験は、その後の創作活動(詩、小説、評論等)を

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

進める上できわめて重要な意味を持つことになる。そのことは、氏の『陳千武詩集』（秋吉久紀夫訳、土曜美術社出版販売、1993年）ならびに自らの追想風小説『獺女犯』（保坂登志子訳、京都：洛西書院、2000年）、さらには氏の一連の作品を紹介、分析した秋吉久紀夫著『陳千武論-ひとりの元台湾特別志願兵の足跡』（土曜美術社出版販売、1999年）等からも明瞭にうかがうことができる。

今回の陳千武氏とのインタビューは、編者が代表を務める後述の「東ティモール日本占領期史料フォーラム」（2003年7月よりトヨタ財団の研究助成で実施中）の依頼に陳氏がお応え下さったことで実現した。氏は2004年5月、早稲田大学の全学共通講座「台湾研究」の講師として来日されたが、講義終了後の5月19日午後、アジア太平洋研究センターを会場に3時間半にわたり、自らの戦時東（当時の呼称ではポルトガル領）ティモール体験を語って下さった⁽²⁾。ここに紹介するヒアリング記録からもうかがえるように、氏は82歳とはとても思えぬ若さとバイタリティ、そして鮮明な記憶力および何点かの当時の記録をもとに、往時を縦横無尽に語られた。とりわけ我々にとっては、以下の諸点が興味深いものを感じられた。

- 一 ポルトガルの主権下にあったものの日本軍が事実上占領下においた東ティモールで、台湾人陸軍特別志願兵がいかなる体験をもったかについては、上述した文学的色彩の濃い諸文献を除きほとんど知られることがなかった。こうした中で恐らく数少ない存命者の一人である陳千武氏は、自らの徴用前後期の状況をふくめ、私情に流されることなく客観的にその体験を語って下さった。東ティモールのみならず当時「南方共栄圏」と呼称された東南アジアには、台湾、朝鮮等日本の植民地から数多くの青年（含女性）が徴用され、彼等の体験についてはいくつかの先行研究や資料集等でも次第に明らかにされつつあるが、公式植民地と南方占領地の関係（とりわけヒトの流れ）については、今後より克明な調査研究が必要であることはいうまでもない。陳氏が述べられた元台湾特別志願兵の方々の組織「南星会」とも早急にコンタクトを取り、彼らの記録を体系的に整理することも、その第一歩となろう。
- 二 日本との関係でいえば被支配民族の一人である陳氏は、ポルトガルの植民地である東ティモールにおいては自動的に占領者＝支配者の一員になるわけであるが、そうした二律背反に台中一中を卒業した植民地の知識青年陳氏が、いかなる心境、立場で関わったかも興味を引く点である。またこの点は、現地一般民衆が台湾（あるいは朝鮮）出身者と日本人をいかに差異化していたのか、あるいはしていなかったかという問題とも密接に関係してくるものである。
- 三 日本軍が開戦前夜からヨーロッパの小国にして中立を宣明していたポルトガルの植民地ティモールに関心を抱いたのは、そこを拠点に対オーストラリア作戦を展開するためであった⁽³⁾。しかしながら1943年以降、とくに同年2月のガダルカナル島撤退以降、戦局が日本にとって次第に悪化するなかで「対豪作戦」の可能性は事実上ほとんど消滅した。そのため東ティモールには食糧その他の必要物資を輸送する日本軍の船舶は来なくなり、陳氏の表現を借りれば島全体が「捕虜島」の趣きを呈するようになる。こうした中で日本軍は現地自活のため、とりわけ食糧不足と長期戦に備えて現地住民から食糧徴発を行うと共に、労働力を徴用し本格的な自給態勢をとることになる。

陳氏の報告からは、そうした態勢作りの具体的状況、とりわけ土着の首長層の協力が重要な役割を果たしたことがうかがわれる。日本の敗戦後、日本軍に協力したこうした伝統的支配層に属する指導者が各地で少なからず住民の報復対象となったといわれるが、陳氏証言からはその間の事情の一端も汲み取ることが可能である。

四 日本 の敗戦直前、独立運動が高揚していたジャワへ「転進」した日本軍の一員として陳氏が体験したことも、なかでも台湾同郷会の存在およびその組織との関わりも、従来のインドネシア独立史研究、あるいは華僑・華人史研究でもほとんど知られていなかった事実である。

また 1945 年 8 月 15 日以降、23 歳の青年陳千武氏は、日本支配から解放された台湾人としての帰属感情を次第に強めるようになる。「明理台湾」建設を目標に掲げた明台会の有力メンバーとなったのも、そのあらわれであった。今日陳氏の手許に残されている明台会の機関誌『明台報』を分析したクリスチャン・ダニエルスは、同会は中華民国（蒋介石政権）と協力し三民主義による新台湾建設を構想したもので、台湾独立あるいは共産主義への共鳴は一切みられないと指摘している⁽⁴⁾。即ち中華民国体制下での新台湾建設が目標であった。

しかしながら、ジャカルタやバンドゥンの台湾同郷会の台湾系華僑から中国の政治腐敗や陳儀（台湾省行政長官）の台湾統治の実情についての情報に接するにつれ、陳千武氏の心中では国民党に対する猜疑心が深まってゆく。この点についてダニエルスは、『明台報』第五号（1946 年 6 月 24 日）に掲載された陳有全の論文「勇往邁進を望む」が、台湾の新権力者に対する疑心を象徴するものだと理解を示している。とりわけ陳有全の文章中の「台湾人は自らの自由や政治・経済の地位が中華民国政府によって犯されることがあれば、断固抵抗すべきだ」との一節を重視する⁽⁵⁾。このように明台会会員に思想上の大きな変化を与えたのが、陳千武氏も強調されている中国総領事館の対応であった。1946 年 3 月～4 月「同胞」として台湾帰郷への支援を求めた陳氏を含む明台会幹部に対し、中国総領事館側は「日本の走狗」ともいふべき非難をもって応じたのであった。

結局、陳氏をはじめ明台会のメンバーは、イギリス軍の船舶でそれからまもない 1947 年 7 月 20 日、基隆帰還を果たしたのであった。二・二八事件が発生したのはそれからわずか七カ月後のことであった。この明台会をめぐる史話も、台湾現代史の激流の起点をみる上で看過できない意味を有するものである。

東ティモールにおける戦時日本占領については、住民側に与えた影響という重要課題をはじめ、研究的にみると東南アジア他地域と比べ大幅に立ち遅れているのが現実である。また文書資料や口述資料等の基本的な研究工具の面でも決定的に不足している。こうした現状の中で、この陳千武氏の証言がささやかながらも研究上の一つの刺激剤となることを期待すると共に、陳氏の益々のご壮健をフォーラム一同心から祈念する次第である。

なお「東ティモール日本占領期史料フォーラム」は該テーマに関する国際的な資・史料（含文献）状況を明らかにすると共に、この時代の東ティモールに関わった当事者・関係者（東ティモール人、日本人、ポルトガル人、オーストラリア人等）からの聞き取り調査を実施し、それらの成果を日英両語で公

刊することを目的としている。東ティモール、オランダ在住の2名の国外協力者を除くメンバーは、以下の通りである。

ジェフェリー・ガン、倉沢愛子、*後藤乾一、塩崎弘明、*ブラッド・ホートン、山崎功、*山本まゆみ、*吉久明宏、*高橋茂人。また当日は、メンバー以外にも陳千武氏夫人、台湾中央研究院の周婉窈博士氏、トヨタ財団プログラム・オフィサー川崎恵津子氏、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程学生紀旭峰氏の参加があった。本ヒアリングのテープ起こしは紀氏が担当した（*印は、陳千武氏からのヒアリング参加者）。

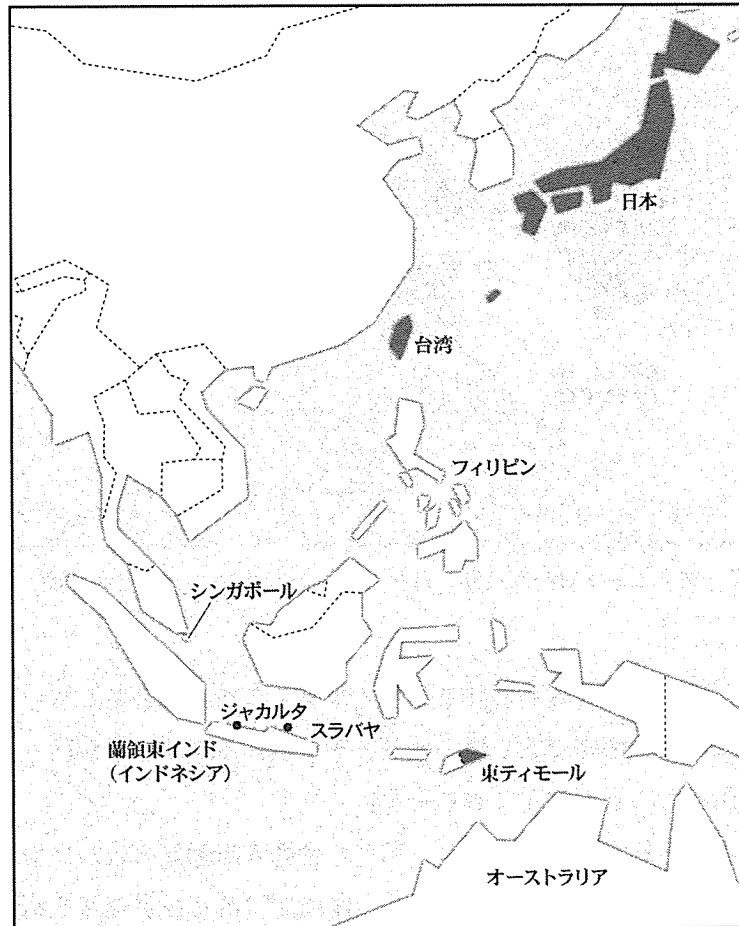
註

- (1) 台湾における陸軍特別志願兵制度については、近藤正己『総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究』刀水書房、1996年、第五章に詳しい。また特別志願兵となった台湾青年の心理と思想を描いた周金波の小説「志願兵」（『文芸台湾』第二巻第六号、1941年9月）を論じた星名宏修『『気候と信仰と持病』論-周金波の台湾文化観』下村作次郎編『よみがえる台湾文学-日本統治期の作家と作品』東方書店、1995年所収も参照。
- (2) 近年、台湾の歴史学界においても戦中期に日本軍の兵士・軍属として「大東亜共栄圏」各地に送られた当事者からの聞き取り調査が活発になっている。たとえば周婉窈編著『台湾籍日本兵座談会記録並相關資料』台北：中央研究院台湾史研究所、1997年、蔡慧玉『走過兩個時代的人：台籍日本兵』台北：中央研究院台湾史研究所、1997年、はその代表的な成果であるが、東ティモール体験者の記録は収められていない。
- (3) この点については、後藤乾一『〈東〉ティモール国際関係史1900-1945』みすず書房、1999年、IV章を参照。
- (4) クリスチャン・ダニエルス（唐立）「雲間の曙光-『明台報』に見られる台湾籍日本兵の戦後台湾像」『アジア・アフリカ言語文化研究』51号、1996年3月、148～149頁。
- (5) 同上、148頁。なおダニエルス論文と並んで前記紀要には『明台報』全5号の全文が、岡崎郁子編で収められている。

陳千武氏とのインタビュー

司会：陳千武先生のお話を聞く前に、手短かに先生の略歴を紹介させていただきます。1922年台中の豊原にお生まれになった先生は台中一中を卒業後、いったんお仕事につきましたが、開戦後の1942年に第一回台湾特別志願兵として志願されました。当時、特別志願兵には20万の台湾青年が志願して1000人しか採用されなかったように競争率が激しかった制度です。その後1943年、台湾の第4部隊に入隊して、2等兵となります。同じ年の9月に、台湾歩兵第2連隊（野戦部隊）に転属されます。この野戦部隊は当時のポルトガル領ティモール（今日の東ティモール）を占領した部隊であり、陳先生は1945年の7月まで東ティモールにおられました。そこから、敗戦の少し前に、インドネシアに向かわれます。インドネシアで独立運動にもかかわるという体験をされます。そして1946年7月に台湾に戻られました。日本占領期に東ティモールに行かれた台湾の方としては大変稀だと思うのですが、戦後の先生は多くの文学作品をご自身の東ティモールでの体験をモチーフに創作されています。

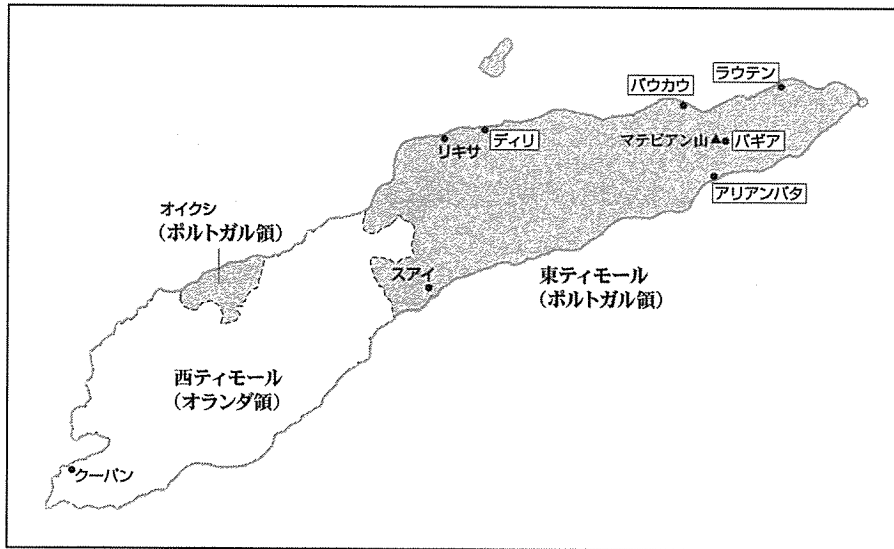
九州大学の秋吉久紀夫先生のご著書に『陳千武論：ひとりの元台湾特別志願兵の足跡』（土曜美術社1997年、現代詩人論叢書第10巻）という作品があります。これは陳先生の作品を分析してそのなかでティモールにかかわる作品を取り上げて、その分析をされたものです。お配りした年譜（略）は、この『陳千武論』の巻末の資料です。さらに東ティモールに関しては先生ご自身の『陳千武詩集：現代中国の詩人』（土曜美術社、1993年）という詩集もあります（秋吉紀久夫訳編）。この詩集の最後のところに、



第1図 日本・台湾・東ティモールの位置関係（作成，菅原祥子）

編者秋吉先生と陳先生との対談記録もあります。そのなかでも、かなり東ティモールについて触れておられます。今日の陳先生にとっても、戦時中の東ティモールでの体験が大変重要な意味をもっているということだと思います。今日はわざわざ台湾からお越しいただきまして本当にありがとうございます。

陳千武：今回、早稲田に来ることができて本当に光栄に思っております。嬉しく思っております。東ティモールについてのことですが、ティモールは当時東と西とに分かれて東のほうはポルトガルの管轄下で、西のほうはオランダの管轄に入っていたわけです。それで私の部隊は1923部隊、即ち台湾歩兵第二連隊（野戦部隊）で、私の『獵女犯』（保坂登志子訳，洛西書院，2000年）という小説のなかに兵隊の兵歴があります。それは台湾の第4部隊から、ティモールに向かったのが1943年の9月30日です。その時、私は二等兵から一等兵に昇級、高雄港から出発して、シンガポール、ジャワのジャカルタ、スラバヤを経由して、ティモール島に行ったわけです。ところが、二晩か、三晩か経って、二隻の輸送船で東ティモールに着いたときには、一隻はすでに攻撃をうけて沈没していました。私たちの乗っていた船はその関係で、その日夕方頃、ティモールのラウテン（中国語では老天，ポルトガル語名ヴィラ・ノヴァ・マラカ）沖に着いたけれど、敵の空襲に備えて、沖の海上をぐるぐる回って、翌朝夜明け方、まだ日が出ていないときに上陸しました。それにしても、上陸の途中でオーストラリアの飛行機の攻撃を受けて、30分後、約3分の1の兵隊が船と共に沈没してしまいました。私は非常に運がよく上陸しまし



第2図 ティモール島略図（陳千武氏の滞在地は四角で囲んだ。作成、同上）

たけれども、亡くなった戦友がずいぶんおりました。東ティモールに駐屯している軍隊は密林のなかに兵舎を作って隠れていて、毎日海岸で石を運んでトーチカを作る臨時工事が何ヶ月か続きました。あの臨時工事はとても苦しかったことを覚えております。

私たちの部隊は、日本人の兵隊だけではなく、私たち台湾人志願兵のほかに沖縄からきた兵隊も一緒に、ラウテンでの臨時工事が終わった後は北海岸から南海岸に跨る横貫道路を構築したのち、ラウテンから南海岸のアリアンバタに移りまして、特攻隊の訓練を受けました。戦争がなくて、毎日オーストラリアからの飛行機がフィリピンへ飛んでいく、フィリピンで攻撃し、爆弾を投下して帰りにここ東ティモールの上空を通っていく。そうすると、残った爆弾をここに落とすのであります。夕方に「襲撃・飛行機が帰ってくるぞ」と爆弾を落としたり、落とさなかったりの毎日を過ごしていました。

その後、アリアンバタからバギアに移ったときは、長くバギアで駐屯しておりました。そのときはもうすでに食料が不足していました。私たちの部隊がティモールに着いた後は、もう最後の船で、全然日本との連絡もつかない。その関係でここでは生活できないので、バギアに移って行きました。バギアには昔ポルトガルの統治していた頃のお城があるんです。それにバギアの平地に広い土地があってそこで現地自活で作物を作る生活をしました。バギアの平地には、20公畝の畑（一公畝は約2934坪）があり、また別に10何公畝の水田があります。水田のほうは、稲を植えているわけです。畑のほうは、全然何も植えていないから、当時兵長にあがった私が派遣されて行ってその20公畝の畑で玉蜀黍を植えたのです。20公畝の畑を耕して玉蜀黍の種を蒔いてそれを収穫するまで、半年くらいですね。それでその収穫した玉蜀黍を干して食料品として野戦倉庫にいます。ま、そういう仕事を、私がやったんですね。ただ一人で。そのとき、このバギア地方には、原住民の酋長が、大王様ですね、おりまして、この大王様の下に小さな国が十カ国あります。その小さな国のなかにも小さな王様がおります。当時、あそこの原住民は、着物を着ていません。女の人は腰巻きひとつ、男は禪一枚だけという生活で、未開発の時代です。あそこの各国の王様が各々自分の国の人力を提供してくれたのが全部で500名です。その原住民

を使役して畑を耕して、玉蜀黍を植えました。500人の原住民のほか、10名の大王のほうからソルダールという原住民の兵隊さんを私の護衛に、一人の秘書（アヅランテ、ポルトガル語）を私のそばにおいて連絡やいろいろ手伝ってくれていました。

その土人はとても淡泊でそして非常に単純で、いろいろやってくれました。でも時々逃げ出したこともあります。そのときは、秘書（アヅランテ）を通じて処分したりしますけれども、わりによく言うことを聞いて、非常にいい仕事をしてくれました。私たちの部隊がジャワに転進してインドのインパール作戦に向かうときに、そのティモールを離れたけれども、離れるとき、500名の原住民たちと秘書（アヅランテ）が跪いて「トゥアン（インドネシア語、大人の意味）残ってください。行かないでください」と言うのです。そういうような経験を、ティモールでいたしました。まず、ここまで、皆様、何か聞きたいことがありましたらどうぞ。

質問：まず最初に、植民地時代のことについてちょっとお尋ねしたいのですが、特別志願兵に志願された動機というのはどういうものだったのでしょうか。何故会社を辞めて、特別志願兵に志願されたのか、その辺の経緯をぜひお聞かせください。

陳千武：このことについて、よく聞かれます。今の若い人、戦後日本植民地時代のことを知らない台湾の人も、皆が非常に不思議に思うんですね。どうして日本の兵隊に志願するのかと言うんですよ。当時、戦争が激しくなったとき、日本としては兵力が、いくらあっても足りないという頃でした。それで台湾特別志願兵制度が施行されたのは、1942年4月、私が製麻会社の監督をやっていたときでした。しかし台湾の志願兵は特別志願兵で、普通の志願兵とは違うわけです。なぜ特別かというと、当時の村長（保正）と隣組の組長（甲長）がある朝、家にやってきまして、「今日は、青年の集会があるから、町の廟に何時までに来てくれ」と言うわけです。それで、その廟に行ったのですが、青年がずらっと長い列をつくってしまして、私は後ろに並んで順番を待ち、廟の入り口においてある机の前で甲長や保正、そして警察が非常に嚴重な状況で立っています。後ろからずっと並んで順番が来たとき、兵役係りが聞きます。

「君、志願したか？」

「何をですか？」

「志願兵だよ。」

「志願していません。」

兵役係りは「そうか、それならいい。ここに君の志願書がある。ここへ拇印するように」というわけで、拇印を押したんです。「君が兵を志願したことは、これで書類が整った」というわけで、これが特別という状況です。

質問：林景明先生という、かつて日本で台湾独立運動に関わった方がおまして、その方の『知られざる台湾』という本のなかで、特別志願兵というのは、「特別」がついているから、本当の意味の志願兵ではなく、「強制」された志願兵だとおっしゃっているんですが、その点はいかがですか？

陳千武：「強制」というより、「君、志願しなければいけない」という国の体制を感じさせて、反対することなく志願書に拇印を押すという状況でした。拇印を押したら、この志願はもう完成したというわけ

です。

質問：ご両親の気持ちと言いますか、やはり戦地に行くのだから、息子と二度と会えないのではないかといい、ご両親の反応はいかがなものですか。

陳千武：私が『獵女犯』という小説のなかに書いたように、私が兵隊にとられたことは簡単なことではなく、志願書を出したのち、町役場でやっと合格してはじめて郡や台中州の訓練所で各1週間訓練をやりまます。台湾の青年が日本の兵隊になるというのも、そう簡単ではないわけです。強制的に、例えば中華民國の軍隊が野原で働いている若い青年を捕まえてきて兵隊にするというのは違うのです。だから郡で1週間、訓練と身体検査をして合格し、そしてまた州の訓練所で1週間訓練と身体検査に合格して、はじめて台北六張犁の台湾志願兵訓練所に入って6カ月間訓練を受けるのです。完全にその訓練が終わったあと、この青年は体格にしても、思想にしてもすべてもう間違いないということではじめて兵隊になれるのです。私は、訓練所で6カ月の訓練を終わって一応家に帰り、青年団の訓練を3カ月間青年団の教官としてやって、4月1日に正式に入隊したのです。

質問：台中一中時代の先生は文学青年、文学少年だったということでしたが、そういう文学の世界から武器をもった訓練の生活に入ってその落差はいかがでしたか。

陳千武：そうですね。私が入隊して訓練所に入るまでは、やはり書いたりすることがありましたけれども、訓練所に入れば、もう全然時間がないし、まったく自分の創作など考えられなかった。訓練所を出てから3カ月間の間も青年団の訓練で忙しい時間を過ごしました。正式に入隊したあとも、全然、文学とは離れてしまいました。

質問：お国のために、つまり日本のためにというお気持ちで軍隊に入られましたか。

陳千武：えっと、あの頃の入隊というのは、非常に華やかなもので、例えば私が入隊したとき、出征兵士を見送る沢山の団隊が借り出されて、郡役所から駅まで道路の脇に学生やら、一般の人が旗を持って君が代を歌って見送るわけです。それで汽車に乗って部隊に行くわけです。私の父も、父は当時の町役場で農業技術の指導をやっておりまして、母は母方の兄が漢詩人で、うちの母はそうした兄の影響を受けて、やはり中国の『西遊記』とか、『紅樓夢』とか、いろんな古典文学をよく読んでおりますから、書くことはなかったけれども、また日本語をまだ話すことができなかったけれども、そうした文学的な素養がありまして、私が兵隊に行くときには、母は悲しみを心に秘めて非常に落ち着いた態度で「行きなさい。体に気をつけて」というくらいの程度でした。

質問：まだ戦闘が激しくなくなっていないから、命を落とすことはないとお母様は自らを慰めておられたのでしょうか。

陳千武：命を落とすということは覚悟の上で、母は私に「体に気をつけて、元気でやりなさい」としか言わなかったけれども、私は母の気持ちをよく分かっていました。母は本当に強い気持ちで、自分を支えて、と同時に息子に悲しい思い、惨めな思いをさせまいという強いところがありました。私はその点で母には今でも感謝しています。

質問：日本人の場合ですと、建前として陛下のために一生懸命頑張りなさい、亡くなったら靖国に祀られるからという風に言ったのだと思いますが、そういうことは台湾ではありませんでしたか。

陳千武：台湾ではありません。天皇のためというのは、公的な政府の言い方であって、個人ではそういうことはないです。だから、私の『獵女犯』という小説をごらんになりましたら、当時の私の気持ちがよく出ています。それからティモールにいたころのティモールでの生活も、思い出として『獵女犯』のなかに書いております。

質問：もう一点、1920年代生まれの、いわゆる皇民教育を受けた世代の台湾の方にお話をうかがったのですが、少年時代の石投げ遊びで、石投げの的にはチャーチルやルーズヴェルトと共に蒋介石の写真もあったというのです。つまり台湾の青年だけでも、大陸の親分蒋介石は自分たちと違う国の親分じゃないかという意識を持ち始めたと理解してよいのでしょうか。例えば日中戦争というのは、台湾の少年としてどういうふうに理解されたのでしょうか。

陳千武：私の場合ですね、私は、当時台湾人の子供が入るのは公学校で、日本人の学校は小学校です。公学校と小学校とは違うわけですが、私は公学校で3年、小学校で4年学んでいます。もちろん公学校に入る前は、日本語が話せなかった、田舎におったからです。

質問：「国語家庭」ではなかったのですか。

陳千武：いいえ。子供のときは、日本語ではなく、家の生活はずっと台湾語でした。7歳になって公学校に入って、はじめて日本語を学んだわけです。公学校3年まで勉強したとき、私の日本語は、わりと上手に話せたのです。私の父は私が公学校で勉強するよりも、日本人の子供が勉強する小学校に入れば、日本人と同じようにいい教育が受けられるという風に考えていました。それで、私が公学校の3年を修業したとき、南投小学校に行って、日本語の試験を受けて合格、南投小学校に入学したわけです。それゆえ、小学校で4年間勉強をして、それから台中一中の試験を受けて、合格してそこに入ったわけです。

質問：少年時代の陳先生にとって中国大陸を祖国と思ったことはありますか。

陳千武：私の場合では、小さい時から母がよくわれわれの祖先は「唐山過台湾」＝「唐山から台湾に渡ってきた人」と話してくれています。中国と言わないのです。さっき、後藤先生が言われたけれども、その中国に対する台湾の人の気持ちというものは一般的な考え方、祖国と考えているのも多いけれど、私の場合は母の教育が「唐山から渡ってきた人」と正しく言っています。私の祖先が台湾にきたのは私の6代前の先祖で、清朝時代は男だけが台湾に渡航を許され、女性は禁じられているのに、私の祖先は妻を連れてきたのです。しかも、私のあの祖先の妻は妊娠していて船の中で子供が生まれたのです。大陸を離れて台湾に移住せねばならない緊迫した事情があったかでしょう。今でも疑問に思っているのですが、その6代前の祖先が鹿港（台湾の中部）に上陸し、自分の住むところを探して、南投の名間キュウワ（平埔族の名づけた地名）に籍を置いて、そこで田畑を耕して働き、永住したわけです。私の母の兄が漢詩人で南投における南陽詩社の社長で、そういう文学家庭の影響を受けて、私の大陸に対する考え方は、一般的に言われるようなものではなく、「唐山」という精神的な原郷に憧れていました。中国という国は明の時代から清朝時代になって、それが中華民国に倒されたのです。私の幼い頃母が言うには、中華民国は簡略して「中華」、「中国」という。中国人は、世界の真ん中の国であることを表示し、高ぶっているのだ。一般の人たちが考えている中国が祖国であるというのは、戦後中国の軍隊が台湾に来たとき、非常に歓迎した後、がっかりしてしまい、祖国じゃないと考えが変わってしまいました。

